

イタリア学会
第67回大会 プログラム

2019年10月26日(土)

鹿児島大学
(郡元キャンパス)

会場 鹿児島大学郡元キャンパス

◆ 研究発表Ⅰ 会場：共通教育棟 1号館 124教室

9:00-9:30

1. 19世紀、海外における亡命イタリア人の行動と「イタリア」をめぐる言説
——アントニオ・ガッレンガを中心に——
発表者：武重千尋（大阪市立大学）
司会：山手昌樹（日本女子大学）

9:30-10:00

2. 駐イタリア日本特命全権公使浅野長勲の外交活動についての政治的考察
——1880年代前半における日伊外交関係を軸に——
発表者：POZZI, Carlo Edoardo（同志社大学）
司会：BERTELLI, Giulio Antonio（大阪大学）

10:00-10:30

3. 一九三〇年代の日中伊関係の多元的構造理解に向けて
発表者：目野由希（国士館大学） 司会：土肥秀行（立命館大学）

◆ 休憩 10:30-10:40

10:40-11:10

4. 1900～30年代の観光絵葉書の題材としてのダンテとダヌンツィオにまつわる土地と愛国プロパガンダ性
発表者：河村英和（跡見学園女子大学）
司会：内田健一（京都産業大学）

11:10-11:40

5. 舞踊評論家 A. G. ブラガリア
——踊る身体の表象と舞踊のナショナリズム——
発表者：横田さやか（日本学術振興会特別研究員）
司会：堤康德（上智大学）

11:40-12:10

6. イタリア語の飲食店名の統語規範を求めて：NPに関する分析および考察
発表者：LO CIGNO, Stefano（京都大学）
司会：鈴木信五（東京音楽大学）

◆ 研究発表Ⅱ 会場：共通教育棟 1号館 122教室

9:30-10:00

1. Gemme, perle e pietre dure: la lirica di Torquato Tasso e le poesie 'petrose' del Cinquecento fiorentino
発表者：AMATO, Lorenzo（東京大学）
司会：水野留規（愛知県立芸術大学）

10:00-10:30

2. *Iter Iaponicum: per un catalogo dei manoscritti e delle edizioni antiche in Giappone* (イテル・ヤポニクム——日本の図書館等所蔵の手稿と古い印刷本のカatalog作成に向けて——)

発表者：LIMONGELLI, Marco (京都大学)、國司航佑 (京都外国語大学)、
霜田洋祐 (大阪大学) 司会：菊池正和 (大阪大学)

◆ 休憩 10:30-10:40

10:40-11:10

3. ボッカッチョ『コルバッチョ』における夢とその役割について

発表者：田中真美 (京都大学) 司会：村松真理子 (東京大学)

11:10-11:40

4. フィリッポ・リッピ《タルクィニアの聖母》
——設置場所に関する一考察——

発表者：芹澤なみき (慶應義塾大学) 司会：池上公平 (共立女子大学)

11:40-12:10

5. ルカ・ジョルダナーノの「セネカの死」—— 17世紀ナポリにおけるフランドル・オランダ絵画受容の観点から——

発表者：小松浩之 (京都外国語大学) 司会：石鍋真澄 (成城大学)

◆ 休憩 12:10-13:15

◆ 総会 13:15-14:30

会場：稲盛会館 キミ&ケサ メモリアルホール

◆ シンポジウム「火山の記憶——ナポリと鹿児島——」

会場：稲盛会館 キミ&ケサ メモリアルホール
15:00-17:30 (開場 14:40)

中 豊司 (鹿児島市危機管理局参事) 「桜島火山との共生」

石峯康浩 (山梨県富士山科学研究所)

「ベスビオと桜島——火山噴火がもたらすもの——」

松田 陽 (東京大学) 「ナポリと鹿児島の火山文化」

芳賀京子 (東京大学) 「火山の噴火と古代美術」

コメント：藤内哲也 (鹿児島大学)、菊池正和 (大阪大学)

◆ 懇親会 18:00 ~ 20:00

会場：学習交流プラザ

19世紀、海外における亡命イタリア人の行動と 「イタリア」をめぐる言説 ——アントニオ・ガッレンガを中心に——

武重千尋（大阪市立大学）

19世紀のイタリア統一運動において、愛国者は亡命先でどのように「イタリア人」として活動したのか。本報告では、イギリスの言論界でジャーナリストとして活動した Antonio Gallenga（1810-1895）に注目し、亡命イタリア人である彼の活動と著作を考察し、イタリアの外におけるリソルジメントの一端を明らかにしたい。

ガッレンガは1859年からイギリスの新聞『タイムズ *The Times*』の特派員記者として第二次独立戦争に従軍した人物である。彼はパルマ公国出身の人物で、パルマ大学在学中の1831年に勃発した中部イタリア革命後に亡命し、亡命後はルイジ・マリオッティという偽名を使った。マツツイーニに接近した後、家庭教師をしながら亡命先を転々とし、アメリカにわたってイタリア語の教師となる。1839年からイギリスに滞在し、イギリスに帰化したのち、*Italy, Past and Present*（2 vols, 1848）を出版して、イギリスの公衆に向けて祖国イタリアを紹介した。

このようなガッレンガの亡命生活を考察すると、亡命イタリア人である彼の周囲の生き生きとした人的ネットワークが浮かび上がる。人的ネットワークの点では、まず海外におけるイタリア人同士のネットワークが確認できる。リソルジメントの様々な局面で亡命していたイタリア人との関係性から、出身地を超えた「イタリア人」のネットワークの存在が明らかとなる。加えて、亡命先の国の人々と亡命中の「イタリア人」との有機的な人的ネットワークも重要である。ボストンでイタリア語教師をしていた時、ガッレンガはハーバードのアカデミックな文学界の人々との交流を通して、アメリカ文学のみならずヴィクトリア期の英国文学の造詣を深めたが、と同時に他方で、イタリア文学やイタリアに対する関心の高いアメリカの人々にとって、英語でイタリア文学を紹介し、生きたイタリア語を話すイタリア語教師は魅力的だった。同様に、イギリスにおいて時事問題として関心の高かったイタリア問題について、事情に詳しいイタリア人が直接英語で提供する情報にニーズがあった、と理解することができるだろう。このように、ガッ

レンガの事例から海外における亡命イタリア人と、亡命先の人々との相互的な関係性が確認できると同時に、亡命先におけるイタリア人に対するニーズを推察することが可能である。

さて、ガッレンガは1848年革命後にロンドンに戻り、マツイーニと袂を分かたつ。1854年からサルデーニャ議会の議員となり、1859年から『タイムズ』の戦争特派員記者として第二次独立戦争に従軍したガッレンガ。多くの著作を残した彼の執筆活動は、愛国的な実践であった。彼は英語で執筆し、イギリスの公衆や世論を対象として「イタリア」を描いた。『タイムズ』は彼に紙面を与えたのである。

本報告では、イギリスで出版されたガッレンガの著作、*Italy, Past and Present* (2 vols, 1848) の言説に注目し、「イタリア」が当時どのように紹介されたかを考察する。この本はそれまでに書かれたガッレンガの文学的な記事や批評記事を多く含みながら、イタリアの歴史や文学に関して書かれたものである。本報告では、本書を亡命愛国者の「イタリア」のイメージとして読み取りたい。ガッレンガがここに描いたイタリアの歴史とそれに対する評価は、ガッレンガの「イタリア」像そのものであり、また、同時に未来に対する願望を含む表象ととらえることが可能だからである。

亡命イタリア人の行動から彼らのネットワークと生き方を、著作から亡命先において表現された愛国者の「イタリア」像を明らかにすることで、国家統一運動の国際的な側面を再検討する。

駐イタリア日本特命全権公使浅野長勲の 外交活動についての政治的考察

—— 1880年代前半における日伊外交関係を軸に——

POZZI, Carlo Edoardo (同志社大学)

浅野長勲(1832-1937)は安芸広島新田藩第6代藩主、そして広島藩第12代(最後)の藩主であった。浅野は、1880年末に元老院議官に任じられ、翌1881年外国公使就任の命を受けた。それから、外務卿井上馨の要請に応え、翌1882年3月20日に正式に駐イタリア日本特命全権公使となり、同年夏にナポリへ向かって横浜を出港した。

当時、1866年8月25日に日伊修好通商条約が締結されたことで始まった日伊間の公式関係は、主に蚕種貿易を中心にしていたが、1870年代の前半以来さらに深くなりつつあり、外交をはじめとする他の分野に関しても強く発展していた。確かに、この発展に非常に貢献した出来事の一つは、1879年と1881年の間にイタリア国王の義理の弟であったジェノヴァ公トンマーズ・アルベルト・ディ・サヴォイア王子(1854-1931)が蒸気コルベット艦「ヴェットル・ピサーニ号」の大洋横断航海の中で果たした2度目の来日であった。

まず、その来日の際にジェノヴァ公が日本の有力者らと確立した密接な友情関係のおかげで、イタリア王国が日本国の貴族および高官の公式訪問の主要な目的地として選ばれ、明治政府と皇室の上層部により重んじられるようになった。例えば、1880年3月8日、前述の来日の際にジェノヴァ公をもてなす責任を負った旧大名鍋島直大侯爵(1846-1921)が駐イタリア特命全権公使に任命された。また、有栖川宮熾仁親王(1835-1895)は、ジェノヴァ公と懇意にしていたため、ロシア皇帝アレクサンドル三世の戴冠式に出席する目的で日本の公式代表者としてヨーロッパへ派遣された際に、最初にイタリアを訪問した。第二に、日本においてジェノヴァ公を指導した、在東京イタリア公使館の運営に携わる責任者たちが、その頃積極的に条約改正問題の解決に従事していたため、明治政府も両国のために有益な条約改正交渉を利用してイタリア王国とのさらに親密な外交貿易関係を樹立しようとする意図があったことも忘れてはならない。第三に、ジェノヴァ公による2度目の来日の際にイタリア王国の武器や大砲は天皇と閣僚の好奇心を

喚起し、その結果、この来日は軍事面での日伊関係の発展を可能にした。実際、その来日をきっかけに、イタリアからの兵器と弾薬の購入のほかに、お雇い外国人としてイタリア王国の陸軍士官らも招聘され始めた。

前述の歴史的背景のなかで、1882年3月に駐イタリア日本公使鍋島直大の後継者となった浅野長勲は、同年8月に有栖川宮熾仁親王を伴ってイタリアに到着し、1884年5月にかけて在ローマ日本公使館を指揮した。管見のかぎり、日本側の一次史料に基づいて浅野公使の外交活動を詳細に考察した研究は現在のところ行なわれていない。その結果、浅野公使が明治初期の日伊関係において果たした役割がまだ明らかにされていない。そこで、本発表では、『海外日録』や『維新前後』などの浅野長勲による文書に加え、主に外務省外交史料館、国立公文書館、そして防衛省防衛研究所で収集した一次史料（書簡と公文書）を活用し、イタリアにおける浅野公使の外交活動について可能な限り包括的な検討を試みたい。特に、本発表の主な目的は1880年代前半において浅野公使がイタリアで果たした役割がどのような歴史的意義を持つのかを証明することである。

この目的を達成すべく、まず、浅野長勲がイタリア王国へ派遣された理由と彼の持ち合わせていた状況を踏まえた上で、浅野公使がローマ滞在の際にジェノヴァ公をはじめとする王室メンバーと結んだ友情関係の政治的意義を考察する。次に、当時の日伊条約改正交渉の際、イタリアとの新条約締結に向かって、浅野公使はどのように動いたのかを詳細に検証する。最後に、軍事面での日伊関係の発展に対する浅野公使の外交活動の影響について考察する。以上の検証から浅野公使によるローマ滞在中の様々な側面を明らかにすることで、彼が日本で果たした役割の歴史的な重要性を示唆する一つの判断材料としたい。

一九三〇年代の日中伊関係の多元的構造理解に向けて

目野由希（国土館大学）

19世紀以降、東アジアで貿易・金融活動を活発化させてきた印僑ほかアジア各国商人と彼らの船舶航行状況については、アジア経済史（籠谷直人など）や宗教学史（青木健）などからの研究が進捗した。

その結果、アジア商人ネットワークが、ブロック経済圏確立後もこれとは無関係に拡大し続けた状況が解明され、「1920年代末からの英仏のブロック経済政策の結果、日本は通商で行き詰まり、戦争せざるをえなくなった」という世界史理解は、次第に変わりだした。ここに日本近現代史研究の進捗が加わり、日中間の1930年代の状況については、これまでとは異なる解釈（= 1930年代の日中満経済活動の膨張に、他国がいかに参与したか）が求められる可能性が生じ始めた（経済史の疋田康行ほか）。

ところで発表者は、「国際ペンクラブと世界文学史の相関——日中印外交と英連邦史、欧州史」（基盤研究（C））などの共同研究を、2019年3月まで運営していた。

ここで発表者は新規に発見したペンクラブ資料から、戦前期日本ペン倶楽部副会長としてイタリア長期滞在した有島生馬の行動の、これまであまり指摘されてこなかった不自然さ（= ローマでの1937年国際ペンクラブ大会は中止になり、会場はパリに変更になった。ところが生馬は、島崎藤村会長ら帰国後も一人ローマに長期滞在し、これを「招聘」での滞在と称した【『日伊文化研究』第5号】。だが生馬の招聘元や招聘理由は不明、滞在費出資者は大倉財閥と日本の外務省・KBS）を、他国資料との関係から総合的に再考することとなった。

さらにこの時、発表者は土肥秀行（イタリア研究）から、マリネッティやイタリアペンクラブ等についての研究者であるセリア・デ・アルダマ・オールドネスを紹介された。彼女と研究討議を行った結果、1930年代の日本ペン倶楽部などを介した有島生馬らの日伊文化外交は、中国を関数として変動する経済史／軍事史と表裏一体の関係ではないか、という仮説的見解を得た。

これは、イタリアから日本／中国／満州への爆撃機ほか武器輸出・工場経営と、国際連盟での日中伊各国代表の主張、国際ペンクラブを介した日中伊英各国の交

渉状況が、相互に関係していると考えられたからである。

さらに発表者は土肥から、ローマ大学の日本研究者マルコ・デルベーネを紹介された。ここで同人より、現在イタリアで研究成果が発表されている、東アジアとイタリア軍需産業史関係研究と論文についての教示を受けた。

マルコ・デルベーネが今後の研究が必要と考える境域こそ、日本の経済史研究者らが近年新たに切り拓いた領域—— 1930年代以降の膨張し続ける日中満の産業界に、イタリアがいかに関与したか——である。

こうして、1930年代日中伊関係が、文学・軍事・外交の局面で、複数の飛行機製造業者やその製品、文化人の動向、大倉財閥等日本の財閥や重工業関係企業の動向と連動するという視点を、今後、検討すべきではないかと考えるに至った。

「(フィアットや大倉財閥等) 軍需産業、その製品と質量が、(詩人マリネッティや文化人有島生馬の動静、中国ペンクラブの動静、国際ペンクラブや日本ペン倶楽部等) 文化活動と、(日伊の国際連盟脱退、その後も続く国際連盟総会での中国都市爆撃に関する日本非難決議等) 外交と文化という上部構造を規定する」という歴史解釈は、唯物史観かもしれない。その点では、本件は古典的な歴史理解に回帰しているようだ。

しかし本件は、古典的解釈でありつつ、実は論証に必要な資料の大半が発見されてこなかった上、本件を論じた各論文の領域が多岐にわたるため、一度も実証されていない。

本発表では、戦前期日本ペン倶楽部が、大倉財閥や外務省、KBSと連携しながら、親伊文化人有島生馬を活用し、1930年代日中伊文化／経済／軍事交流を行った経緯について、新資料を活用しながら論じていきたい。

1900～30年代の観光絵葉書の題材としての ダンテとダヌンツィオにまつわる土地と愛国プロパガンダ性

河村英和（跡見学園女子大学）

二つの大戦間イタリアの絵葉書は宣伝メディア的責務を負っていた。20世紀初頭から黄金期を迎えた絵葉書のジャンルは多種多様だが、ここでは1900～30年代に印刷されたダンテとダヌンツィオにまつわる観光絵葉書に焦点を当て、そこから垣間見られる愛国的プロパガンダ性を検証する。この二人の詩人の密接な関係を論じた文学研究は数多いが観光図像的視点からみた研究はまだない。

まずダンテ関連の絵葉書ではベアトリーチェとの出会いのシーンや、多色リトグラフ印刷で『神曲』の主要場面を描いたシリーズがあり、ダヌンツィオの『フランチェスカ・ダ・リミニ』の名場面を描く実写絵葉書シリーズもあるが、これらは文学主体である。ファシズム期にはダンテの肖像絵葉書が政治的に利用されたり、同年代にはダヌンツィオの肖像絵葉書も数多く発行されムッソリーニの肖像絵葉書に準ずるプロパガンダ的な役割を担ったり、一方でダヌンツィオはカリカチュア絵葉書も多いが、いずれも観光絵葉書ではないので除外した。

何よりもダンテは国家統一後イタリア文化の象徴の頂点として、その彫像が各地に建立され絵葉書の題材となった。生誕600年の1865年にはフィレンツェとヴェローナ（前者は生誕地、後者は訪問地）に、没後550年の1871年にはナポリとマントヴァに設置され、1920年代のナポリのダンテ像の絵葉書には、ダヌンツィオの詩『ダンテに捧ぐ』の引用が添えられた。イタリア文化圏であることを主張するため「未回収の」町トレントに1896年に建ったダンテ像の絵葉書には、除幕式用にカルドゥッチが書いた詩やダヌンツィオの詩集『エレクトラ』からの引用が付された。

ダンテが亡命中に訪れたフォルリヤ、『神曲』中で言及される町チェゼーナの絵葉書には『神曲』からの引用が載せられた。ベルティノーロの教会の絵葉書では、ここでのダンテの滞在を謳ったカルドゥッチの詩とともに印刷されたものがある。ダンテが身を寄せたフォスディノーヴォにあるマラスピーナ城の絵葉書では「煉獄編」の関連個所の引用を添えるのが定番だが、ダヌンツィオやカルドゥッチの詩の引用を添えて発行されることも多い。ファルテローナ山にはダンテの名

を冠した山小屋があり、絵葉書の題材となって「煉獄編」からの引用が載せられた。

ダヌンツィオにまつわる場所の絵葉書では、生誕地バスカーラ（生家や松林）、住んだ家ではセッティニャーノのラ・カッポンチーナ荘やガルドーネ・リヴィエラの大邸宅「ヴィットリアーレ」があるものの、これらに詩の引用が添えられることはほとんどない。その一方で、この詩人が謳ったサルデーニャ島の滝サ・スペンドゥラの絵葉書には詩も一緒に掲載され、空軍省の宣伝印刷局から発行された航空写真でみるイタリアの観光名所の絵葉書シリーズには、ダヌンツィオの飛行機小説『多分よし、多分だめ』からの引用も登場した。

作品の舞台となったアブルッツォ州の町も絵葉書の題材として1920年から増加する。『死の勝利』の主人公の故郷グアルディアグレーレや、月明りに照らされた漁業小屋トラボッコがでてくる町サン・ヴィート、『岩場の乙女たち』に登場するポーポリヤカーゾリ、『イオリオの娘』にでてくるマイエツラ山麓のカヴァッローネ洞窟、アンヴェルサ・デッリ・アブルツィという村については『柀の下の松明』の舞台であることをアピールする絵葉書も発行され、アブルッツォの観光地としての認知はダヌンツィオの功績によるところが少なくない。

さらにファシズム期は「アノニマスな」自然風景写真の雰囲気合った詩の引用を添えた絵葉書が流行していた。ダンテとダヌンツィオはもちろん、他の数々の詩人たちの詩の引用を付した例も頻出しており、愛国的なプロパガンダ絵葉書の興隆と同時期にイタリア独自に花開いた絵葉書版ナショナル・ロマンティシズムともいえる現象だった。

舞踊評論家 A. G. ブラガリア ——踊る身体の表象と舞踊のナショナリズム——

横田さやか（日本学術振興会特別研究員）

20世紀初頭、未来派（未来主義）はダイナミズムを謳い、自動車のスピードと飛行機のアクロバット飛行の体験を芸術創作の源とした。「静」を拒み「動」に焦点をあてる未来派の現象の周縁にブラガリア兄弟による写真、映画、演劇における創作があり、とりわけ Anton Giulio Bragaglia（1890-1960）は、舞台美術や舞踊にまで関心を広げ、数多くの芸術論を書き残した。フォトダイナミズムと称された動体写真や、*Thais*（1917）に代表される映画における功績に比較して、舞踊は副次的な主題であったものの、近年イタリアの舞踊研究には、ブラガリアの記した舞踊論を再考察する傾向が見られる。本発表では、そうしたイタリアのダンス・スタディーズの現況を背景に、舞踊評論家としてのブラガリアの姿を描き出すことを試みる。

19世紀に完成したバレエの形式に対し、20世紀初頭にはモダン・ダンスが隆盛し、身体芸術の革新はふたつの潮流に分かれる。ひとつは Loie Fuller（1862-1928）が先駆をなす、技術を取り入れ機械に融合する身体を舞踊の主体とする流れであり、もうひとつは Isadora Duncan（1877-1927）が先駆をなす、自由なダンスや、内面性や精神性を主題とする表現舞踊への流れである。未来派の身体芸術への関心は、前者を象徴する「増強した身体」が演じる作品の提案から、機械と融合した身体による精神性の表現の可能性へと、両者の潮流を跨いで展開する。一方、ブラガリアは、ロシア出身のダンサー Jia Ruskaja（1902-1970）による、舞踊教則から解放された踊りを評価し、後者を代表する Rudolf Laban（1879-1958）の理論やドイツ文化圏のダンサーたちの身体のダイナミズムを考察した。

ブラガリアが批評の対象としたダンサーや振付家は多岐に渡り、偽名を多く使用したことから、かれの舞踊論を一元化することは難しい。体系化された批評というよりいささか散漫な印象もある。しかしながら、本発表では、舞踊批評が成立していない時代に、ブラガリアの舞踊に向けられた眼差しが切り開いた可能性に光を当てることで、重要なふたつの特徴を明らかにする。写真を媒体とした身体表象が舞踊論に発展した点と、舞踊史を政治的文脈で編み直す視点である。

まず、ブラガリアの身体芸術への関心は、1933年に《L'Ala d'Italia》に寄稿された「航空ダンス」論に結実したといえる。ブラガリアは、重力に抗う舞踊の特性に着目し、同時代的視点からの理論化を試みている。飛翔と舞踊をめぐる考察は、Filippo Tommaso Marinetti (1876-1944) の舞踊台本にも通じる。事実、「航空ダンス」論は未来派の「航空美学」を牽引した Enrico Prampolini (1894-1956) との対話が着想のきっかけだった。しかし、ブラガリアの「航空ダンス」論に際立つのは、テキストとイメージが効果的に補綴し合う踊る身体の表象の手法である。各ページに挿入されたダンサーの写真は、大地から解放されて踊り飛翔する身体のダイナミズムを視覚的に提示し、そこにはフォトダイナミズモからの発展が見て取れる。

また、ブラガリアは同時期に舞踊史におけるイタリア性についての持論を展開している。Marie Taglioni (1804-1884) をはじめとする舞踊史に軌跡を残した踊り手や振付家、理論家とイタリアの民族性を関連付ける理論である。それらの事例を短絡して舞踊におけるイタリアのオーソリティーを主張しているきらいがあるものの、一方で、タリオーニのようにロマンティック・バレエの軽やかさに身体の鍛錬を見透かす視点は、ファシズムの身体論を背景とした独自の指摘であるといえる。

ブラガリアの舞踊評論はとりわけ1920年代から30年代を通じて展開されたが、本発表では、主に30年代のテキストを取り上げ、踊る身体の表象を通して舞踊におけるナショナリズムへと展開するブラガリアの舞踊評論を考察する。

イタリア語の飲食店名の統語規範を求めて： NP に関する分析および考察

LO CIGNO, Stefano (京都大学)

我々はどのような基準で食事を済ますレストランや他の類の飲食店を選んでいるのだろうか。偶然通りかかり外見が気になったり、知人の勧めであったり、また昨今では予約サイトの投稿を参考にしたりすると考えられる。しかし、飲食店にとっての「名刺」である店名もその中の一要素として含まれると考えられる。店名は飲食店への第一印象を与えている上に、ある種の記号として我々客の意識に働きかけている。

飲食店の経営を仕事にしようとしている人にとって、自分の店に命名するという行為は、残りの人生を共に歩んでゆく存在であるかのように、自分の子供に名前を与えるという行為に等しい。常に様々な言語学的な規則を無意識に利用し、発音のしやすい店名や、掛詞などを巧みに使った店名を経営者は心がけている。しかし、言うまでもなく、その命名プロセスはただ語を自由に選び（範列）、自由に並べる（統語）ばかりではない。範列では比較的に自由度の高い選択肢が見られる一方、統語では選択の自由度がより狭まると推測できる。

そこで、店名を巡ってどのような統語規範及び規則が存在しているかを探るため、発表者の母国であるイタリアの飲食店の様々な店名を収集し、統語範疇と統語的な構成素（NP）の観点から分析を行った。まず、統語範疇（品詞）の段階における品詞の出現度及び可能な組み合わせを探り出した。また、NP の段階において名詞句を構成している他の構成素はどこまで自由に移動できるかの他に、名詞の間に存在する同格関係を考慮に入れ、ある語は店名の成り立ちにどこまで必要であるかを調べた。すなわち、本研究の分析は店名を構成している語は内部構造ではどのような順番や組み合わせで用いられるかと、名詞句とみなした上でその構成素がどのように操ることができるかに分かれている。なお、イタリア語における固有名詞の分類問題をめぐり、限定詞（定冠詞、不定冠詞、分詞）が文中に果たす機能を利用し店名はどのような固有名詞であるかを確かめる。

本研究におけるデータの全ては言語景観の Ben Rafael et al. (2006) がいう Bottom-up（個人による）に位置付けられており、2018年8月と9月の間に収集さ

れた物である。発表者が訪れた北イタリアの都市（ミラノ、ボローニャ、リミニ、フィレンツェ、ヴェローナ）でイタリア人が経営している飲食店の店名を撮影した。その件数は114件に上る。撮影した表記に基づいて、統語論的な分析を行った上で、その構造および特徴について論じた。

また、日本の言語景観において、若干特異なイタリア語「Pseudoitalian（和：擬似イタリア語）」（Bagna & Machetti, 2012; Vedovelli & Casini, 2014）が比較的に多く見られることは既に先行研究で取り上げられている。しかし、主に量的な調査を行うのみで、店名とその言語学的な成り立ちに限定する報告がない。そもそも、あるイタリア語表記が「Pseudoitalian」として見なされる基準が定められていない。そこで、本研究は比較研究や「Pseudoitalian」を客観的に判定できるようなガイドラインの作成への第一歩になることが望まれる。

Gemme, perle e pietre dure: la lirica di Torquato Tasso e le poesie 'petrose' del Cinquecento fiorentino.

AMATO, Lorenzo (東京大学)

Fra le liriche scritte da Torquato Tasso e pubblicate nell'edizione Solerti-Mayer è possibile individuare una tematica che attraversa diversi metri e generi poetici, ovvero quella 'petrosa'. Nella ballata *Con qual focil meraviglioso, Amore* (n. 148, vv. 1-3) leggiamo: «Con qual focil meraviglioso, Amore, / il mio bel foco hai desto, / e di qual selce tratto il vivo ardore?», con riferimento alla selce, usata come pietra focaia, e quindi alla bellezza della donna amata come 'pietra focaia' d'Amore. Nella ballata *Donde togliesti il foco* (n. 158) ricorre un tema analogo, con in più aggiunto il tema della «gelata pietra / che non si spetra per continuo pianto, / ma quando più l'irrigo più s'indura» (vv. 4-6), derivato dalle canzoni petrose dantesche e da Petrarca, ma anche da un importante sonetto di Giovanni della Casa, *Vivo mio scoglio e selce alpestra e dura* (*Rime* XLIII:, vv. 1-6): «Vivo mio scoglio e selce alpestra e dura / le cui chiare faville il cor m'hanno arso; / freddo marmo d'amor, di pietà scarso, / vago quanto più pò formar natura; / aspra Colonna, il cui bel sasso indura / l'onda del pianto da questi occhi sparso».

Le stesse tematiche 'petrose' ricorrono nei tre madrigali scritti per Curzio Ardizio e pubblicati da Solerti con i nn. 439, *La mia tenera Iole*, 440, *Appare in dura pietra*, e 441, *Ardizio se ben miri*. Ad es. in 440 leggiamo «Appare in dura pietra / il molle d'un bel volto, / se con bell'arte avvien che vi sia scolto. / ... molle il riso gentile / che l'alme dure spetra: / il mio stil no, tanto ei per arte impetra»; e in 441, 4-6: «Molle è in lei quel di fuori, / dentro ha marmi e diaspri. / Sol ne la scorza i versi miei son aspri». Anche in questo caso, come dimostra la rima *diaspri : aspri*, è evidente la derivazione e dantesca e petrarchesca, ma allo stesso tempo si palesa l'intermediazione di Giovan Battista Strozzi il Vecchio, che alla simbologia delle pietre (marmi, diaspri, porfidi, serpentine, alabastri, ambre, diamanti, smeraldi, perle e gioielli, ma anche scogli, selci, ecc.) aveva dedicato numerose serie di madrigali, molto imitate da poeti contemporanei (es. Mario Colonna, Giovan Battista Strozzi il Giovane e Antonio Buonaguidi). E la scelta del metro e alcuni elementi interni suggeriscono che Tasso doveva conoscere bene la poesia dello Strozzi e quella dei madrigalisti a lui contemporanei.

Interessante poi l'analisi di una sestina che Tasso dedica alla signora Porzia Mari Grillo, (*Rime d'occasione* n. 1243), *Un bel dolce tranquillo e cheto mare*, che trasfigura l'intero mondo in materie preziose, mediante una serie di 'dipinti' poetici nei quali gioielli, perle e pietre diventano colori e sostanza di un mondo fantasmagorico e fantastico (vv. 1-5): «Un bel, dolce, tranquillo e cheto Mare, / con alghe di smeraldo e rena d'oro, / ha grembo pien di gemme e pien di perle; / e l'aura tremolar di riva in riva / fa ne' vaghi zaffiri ardenti raggi». Si paragoni al Tasso la sestina di Strozzi il Vecchio, *In qualche stranio e periglioso scoglio*, oggi inedita ma celeberrima nel Cinquecento (vv. 13-15): «Eran d'oro et d'argento et d'ambra l'onde, / di Pierrade et d'Amor ciascuna stella, / di smeraldi et zaffir la bella riva».

Nel corso del mio intervento analizzerò le poesie dedicate dal Tasso alle pietre dure e ai gioielli nell'ottica del suo rapporto con la cultura fiorentina, proponendo paragoni e accostamenti inediti. Questa analisi intende anche avviare una riflessione sull'importanza della poesia cinquecentesca fiorentina nella formazione dei gusti poetici del giovane Tasso.

イテル・ヤポニクム ——日本の図書館等所蔵の手稿と 古い印刷本のカタログ作成に向けて——

LIMONGELLI, Marco (京都大学)

國司航佑 (京都外国語大学)

霜田洋祐 (大阪大学)

イタリアと日本の研究者が共同研究チームを組み、日本国内の様々な研究機関や図書館に所蔵された手稿および印刷本のカタログ作成を目標とするプロジェクトを立ち上げた。これをパウル・オスカル・クリステラーの名著 *Iter italicum* にちなんで、イテル・ヤポニクムと呼ぶ。本発表では、プロジェクトの概要の説明と注目すべき事例の紹介をイタリア語および日本語で行う。

これまで、対象を 1600 年までのイタリア語による手稿および印刷本に限定し、国内の大学図書館および研究機関に所蔵された貴重書の調査を行ってきた。現時点で蔵書が確認されているのは、数点の非常に興味深い手稿、ダンテ作品や古典の俗語訳を始めとする多数のインキュナブラ（揺籃印刷本）、極めて高い価値を有するアルドゥス版の印刷本の数々、さらには 16 世紀後半のイエズス会士の日本における活動の記録、などである。

日本国内における蔵書の全体像を確認した上で、発表の後半ではこれまでに行った現地調査の成果を報告する。そこでは、『神曲』や『カンツォニエーレ』等の 16 世紀の印刷本のいくつかを個別に取り上げ、そこに書き込まれた注釈を中心に具体的な研究内容を紹介したい。

Iter Iaponicum: per un catalogo dei manoscritti e delle edizioni antiche in Giappone

Marco LIMONGELLI - Kosuke KUNISHI - Yosuke SHIMODA

Si presenta qui l'*Iter Iaponicum*, un progetto di ricerca nato per accrescere la visibilità del patrimonio librario antico in lingua italiana conservato in Giappone attraverso la realizzazione di un censimento nazionale dei manoscritti e delle stampe antiche (sino al 1600) presenti presso istituzioni pubbliche, private o singoli.

Per l'occasione si presenteranno i membri del team di ricerca e si offrirà una breve panoramica della situazione libraria sul territorio nazionale. Le prime indagini nei fondi di libri rari di alcune università e istituzioni hanno già recato alla luce esemplari manoscritti di notevole interesse. È il caso di un testimone di metà Quattrocento – che arricchisce una già densa tradizione manoscritta di 152 esemplari – de *La sfera*, poemetto astronomico-geografico in ottave la cui paternità è contesa tra i fratelli Gregorio e Leonardo Dati; un libro contabile di Francesco de' Medici relativo al biennio 1471-1472; e un codice tardocinquecentesco recante gli Statuti veneziani rivolti al *Provedittore*, le cui controguardie (le carte di guardia incollate all'interno dei piatti della legatura del codice) contengono una trascrizione seriore – forse tardotrecentesca – in bella copia di un testo liturgico in latino, la *Feria quarta quattor temporum mensis septembris*.

Ricca è la serie degli incunaboli. Spiccano gli esemplari danteschi: la prima edizione e le numerose ristampe della *Commedia* corredata dal noto commento da Cristoforo Landino (1481, 1491, 1497, 1520, 1529, 1536), l'impressione bresciana illustrata dello stampatore dalmata Bonino de' Bonini (1487) e la *princeps* del *Convivio* (1490). Rilevante è anche la presenza dei volgarizzamenti: quello – in passato attribuito a Jacopo Passavanti – del *De Civitate Dei* agostiniano (ante 1483); i *Dialoghi* di Gregorio Magno (1487) nella traduzione di fra' Domenico Cavalca; e il volgarizzamento dell'*Historia naturalis* di Plinio (3^a ed., 1489), dedicato dal Landino a Ferdinando re di Napoli. Accanto a questi, si registrano due copie dell'imponente *Summa de arithmetica geometria, proportioni et proportionalita* di Luca Pacioli (1494).

Di notevole pregio, inoltre, sono le alpine del *Canzoniere* petrarchesco (1501), della *Commedia* (1502 e 1515) e della *princeps* del *Cortegiano* di Baldassar Castiglione (1528), e alcune

edizioni dell'opera del Bembo: le prime due delle *Prose della volgar lingua* (1525 e 1538), quella più tarda uscita dai torchi di Gualtero Scotto (1552) e la *princeps* delle *Rime* (1530).

Cospicua è la presenza di testimonianze dell'attività dei Gesuiti in Giappone nel secondo Cinquecento, con un gran numero di avvisi, relazioni, lettere, ragguagli e descrizioni; interessi più specifici si registrano in altre sedi, con i trattati, manuali, tariffari e prontuari sul commercio, le valute, i bandi e le dogane conservati a Nagoya, o con i saggi cinquecenteschi su discipline sportive e arti marziali (in particolare su equitazione e scherma) dell'Università di Scienze Sportive.

In questa fase ci soffermeremo sulle glosse ad alcune antiche stampe conservate presso l'Università di Kyoto, la KUFS e Tenri, con un esame preliminare delle annotazioni manoscritte presenti nel *Convivio* del 1529, nella *Comedia* curata da Ludovico Dolce per i tipi di Gabriele Giolito de' Ferrari (1555) e nell'edizione veneziana del 1581 del *Canzoniere* petrarchesco commentato da Giovanni Andrea Gesualdo, di mano del bolognese Gualterotto Leoni.

ボッカッチョ『コルバッチョ』における夢とその役割について

田中真美（京都大学）

ジョヴァンニ・ボッカッチョの *Corbaccio*（『コルバッチョ』 c. 1354-65）は、作家自身が一人称の語り手となる俗語による最後の物語作品である。ある未亡人に恋した語り手は、彼女に手酷く振られたことに思い悩んでいた。そこへ、夢の中にその未亡人の夫の亡霊が導き手として現れ、語り手の苦悩に対して問答と教示を重ねつつ、世俗の肉体的恋愛からの脱却を論ず。物語のほとんどはこの夢の中で展開され、語り手の恋の顛末が明かされると、導き手によって語り手の犯した罪がつまびらかにされる。男女それぞれの一般的性質が述べられ、件の未亡人についてはその実態が情け容赦なく暴露される。これによって自らの過ちに気づき、改心した語り手は、目覚めるとこの夢で伝達されたことを信じ、世俗の愛からの脱却を現実にも誓う。さらに、これを読者たる若者たちに伝えることを責務として作品にしたための、という。夢を媒体として伝えられた知識は、「私によって書かれるものが、（神の）至聖なる御名の名声となり誉れとなり、読む機会を得ることになる者たちの魂にとっては有益なるものとなるように（per me quello si scriva che onore e gloria sia del suo santissimo nome, e utilità e consolazione delle anime di coloro li quali per avventura ciò leggeranno）」と書物にされたのだ。

一方、「夢」という題材自体は、古典古代から中世にかけての伝統にもれず、『デカメロン』4日目第5話や第6話、9日目第7話などの真実を語る予知夢を用いた教訓話に代表されるように、ボッカッチョが著作中で何度も導入したものである。また、百科事典的作品においても言及が認められる。*Genealogie deorum gentium*（『異教の神々の系譜』 c.1360 in poi）では、マクロビウスの分類を踏襲しつつウェルギリウスらを引いて、夢には真実を語るものとそうではないものがあるという一般的な理解を提示した。加えて、『デカロメン』4日目第6話の導入箇所におけるパンフィロの発言や *De casibus virorum illustrium*（『名士列伝』 c.1355-60）では、道徳上よく生きるための指針となる夢は信じるべきであるとの考えが示唆される。作家にとって、夢とその教示内容、そして、その実践ということが密接な関係をもっていたであろうことは予想されてしかるべきであろう。予言夢がいかんにして現実において実践されるか、という問題は、もちろん当時の人々の実生

活において一般的な行いがいかなるものであったかを抜きにしてその全体像を語ることはできないだろう。しかし、*Corbaccio* は、夢を見るに至った経緯、夢で得られる知識、目覚めと信用、夢による知識の実践に至るまでが詳細に語られている点で、少なくともボッカッチョが夢に対する態度はどうあるべきと考えていたのかを考察する上で注目に値すると思われる。

本発表では、*Corbaccio* においてまさに夢とその実践がどのように描き上げられているかを読み解く。作家の求める夢の受容の在り方が、この作品に描かれる語り手の態度のうちいかに現れているかを確認し、その上で、この夢自体の提示のされ方と、作品の教本的な性格に対し媒体としての夢が担う役割について考察する。

フィリッポ・リッピ《タルクィニアの聖母》

——設置場所に関する一考察——

芹澤なみき（慶應義塾大学）

初期ルネサンスのフィレンツェ派を代表する修道士画家フィリッポ・リッピ（1406-1469）は、1437年に通称《タルクィニアの聖母》（ローマ、国立絵画館蔵）とよばれる聖母子画を制作した。本作品は1917年に美術史家のピエトロ・トエスカによってタルクィニアのサンタ・マリア・ディ・ヴァルヴェルデ聖堂で再発見され、画面下部に描かれたカルティーリオからその制作年を特定できる最初の作品として、リッピの画業の基準作とされてきた。

本作品の注文書などは現存していないものの、注文主はタルクィニア出身の教皇付き軍人でフィレンツェ大司教も務めたジョヴァンニ・ヴィテッレスキ（1395頃-1442）とされている。これまでの先行研究では、その彩色や人物の動作表現、精緻な細部描写や複雑な光の表現などに焦点が当てられ、その革新的な様式の形成および発展や北方絵画の影響などが論じられることが多かった。しかし、当初の設置場所や本作品の機能に関しては不明な点が多く、従来の研究ではごく簡単な言及はなされてきたものの、これらの点に詳細な検討が加えられることはほとんどなかった。また、設置場所が言及されている場合でも、研究者の間で今なお見解は一致していない。

作品の設置場所を巡っては、これまで主に、タルクィニア市内の聖堂やヴィテッレスキの居住地であったヴィテッレスキ宮などが候補地として挙げられてきた。トエスカをはじめジェフリー・ルーダやジョン・E・ローなどは設置場所について言及しているものの、詳しい考察を加えているわけではなく、いずれもその断定を避けている。これに対し、管見の限りただ一人設置場所について詳細に論じているリビア・カルローニは、ヴィテッレスキ宮のそばに位置していたアウグスティノ会修道院付属のサン・マルコ聖堂を設置場所と特定している。その主な理由は、彼女によれば、ヴィテッレスキ家がこの聖堂と関係しており、注文主のジョヴァンニ自身もアウグスティノ修道会と密接な関係を有していたことによる。しかし発表者は、これをもとにただちに設置場所がサン・マルコ聖堂であったとすることには疑問を感じる。

そこで本発表では、以下のような祭壇画研究の視点、すなわち、文字が記された紙切れのモチーフ（カルティエーリオ）や全身の聖母子像の背景には通常みられない室内描写などの特異な図像、ゴシック風の額におさめられ上部にアーチを冠した本作品の絵画形式、一般の信徒に向けられた祭壇画か個人の祈禱を意図した祈念画かといった機能、などの点から本作品を多角的に検討した上で、ヴィテッレスキ宮内の個人礼拝堂がその設置場所であったとの試論を提示したい。本作品を中心とする展覧会（*Altro Rinascimento. Il Giovane Filippo Lippi e la Madonna di Tarquinia*、ローマ国立絵画館、2017）を機にまとめられた最近の研究では、額がオリジナルであることや、ヴィテッレスキ宮の当時の建設状況や装飾プログラムなどについて新たな知見が示されており、これらの研究成果も踏まえて検討を進めることにする。

以上のような祭壇画研究の視点に基づいた多角的な検討を通じて、設置場所の問題がその他のさまざまな観点と有機的に関連していることが明らかになろう。換言すれば、絵画の設置場所は、注文主の政治的地位や当時の社会的背景と深く結びついており、絵画の形式や図像を方向づける一因ともなりえたのである。設置場所の検討によって、従来の発展史的様式論にとどまらない複眼的な視点から本作品を新たに捉え直すことが可能となろう。

ルカ・ジョルダーノの「セネカの死」

—— 17世紀ナポリにおける フランドル・オランダ絵画受容の観点から——

小松浩之（京都外国語大学）

「セネカの死」が絵画主題としてとりあげられるようになったのは、ユストゥス・リプシウスの仕事を通じてこのストア派の哲人の生涯と著作にたいする関心が高まった17世紀のことである。新たな主題の絵画化の端緒は、リプシウスによる校訂版『セネカ哲学著作集』第二版（1615年）の版画挿絵のために素描を提供したルーベンスであったが、その普及にもっとも貢献したのは疑いなくナポリ人画家ルカ・ジョルダーノ（1634-1705）である。

ジョルダーノは古代哲学者の半身像や物語画を多く手がけたことでも知られ、「セネカの死」はそのなかでもっとも成功を収めた主題と言える。現在7点の作例が確認されているジョルダーノによる「セネカの死」に共通する特徴は、頭が禿げあがった髭のない老人の姿でセネカが表されていること、そして、複数の人物が死に臨むセネカを囲む構図である。これらはルーベンスの素描や絵画作品に直接由来するものではない。さらに、古代哲学者を表したジョルダーノ作品はこのジャンルの開拓者ジュゼッペ・デ・リベラの影響という枠組みで説明される傾向にあるが、リベラに同主題の作例は見られない。それゆえ、ジョルダーノの視覚的源泉はリベラ、ルーベンスという彼にとってなじみ深い巨匠たちとは別に存在したはずである。

実際、セネカの顔貌にかんしては、レーニによるテラコッタ製の《セネカの頭部》およびその素描が参照点となった可能性が指摘されている（Pestilli 1993）。一方、構図にかんしては先行研究の見解は分かれている。Prohaska(2001)は、ジョルダーノがローマのヴィンチェンツォ・ジュスティニアニーニが所有したヨアヒム・フォン・ザンドラルトの作例を見た可能性を示唆している。それにたいして Scavizzi (2011) は、1650年以降ヴェネツィアで活動した外国人画家による古代哲学者の死を表わす作品群から影響を受けた可能性を主張している。

両者の見解はともに全面的に否定されるべきものではないが、ジョルダーノ作品の直接的な参照点を確定するにはやや決め手に欠けている。ザンドラルト作品

は17世紀前半ローマでもっとも著名な蒐集家のコレクションに属していたものではあるが、本発表で指摘するように、ジョルダナーノは他の画家の手になる同主題の作例をナポリで目にする事ができたにちがいない。また、ヴェネツィアの外国人画家たちの現存する作品のなかに「セネカの死」は確認されていないため、そこにジョルダナーノの着想源を求めることは躊躇われる。

本発表の狙いは、先行研究の見解を全面的に覆すような新たな仮説を提出することではない。そうではなくて、これらを見解を踏まえて17世紀イタリアにおける「セネカの死」の受容過程の全体像を素描すること、そして、この文脈に照らしてジョルダナーノ作品の視覚的源泉と受容環境についてあらためて考察することにある。

発表ではまず、「セネカの死」を表すジョルダナーノ作品の特徴を概観し、ルーベンスに由来する作品との相違を確認する。次に、北方におけるカラヴァッジョ主義の影響を受け、イタリアで活動したふたりの画家、ザンドラルトとマティアス・ストームの作例をとりあげ、北方出身者のネットワークが同郷人の作品の流通網を形成していたことを提示する。そして、ジョルダナーノが「セネカの死」という新しい絵画主題をレパートリーにとり入れることができたのは、このネットワークに所属していたナポリのフランドル人商人ガスパル・デ・ローメルを通じてであった可能性を指摘する。

リプシウス、ルーベンスに端を発する「セネカの死」のイメージがイタリアに浸透していった過程を辿る、以上の議論を通して、北方の画家たちの作品がジョルダナーノの視覚的源泉となったとともに、このナポリ人画家の作品の受容環境を整備していったことが明らかになるだろう。

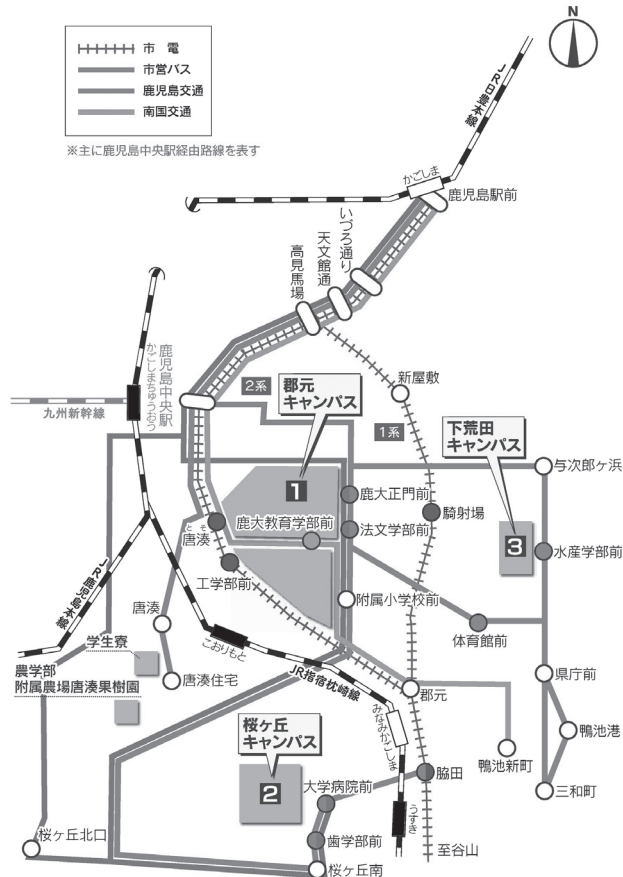
大会会場

鹿児島大学郡元キャンパス 〒890-0065 鹿児島市郡元 1-21-24

アクセス

アクセス方法はこちらで参照ください。(https://www.kagoshima-u.ac.jp/about/access.html)

■鹿児島市へのアクセス 鹿児島空港から鹿児島空港リムジンバスで鹿児島中央駅まで約40分



昼食

大会当日は、キャンパス内の中央食堂が営業しています。このほか、大学周辺の飲食店やコンビニエンスストアなどをご利用ください。

懇親会のご案内

日時：大会当日 18時00分から20時00分まで

会場：鹿児島大学 学習交流プラザ

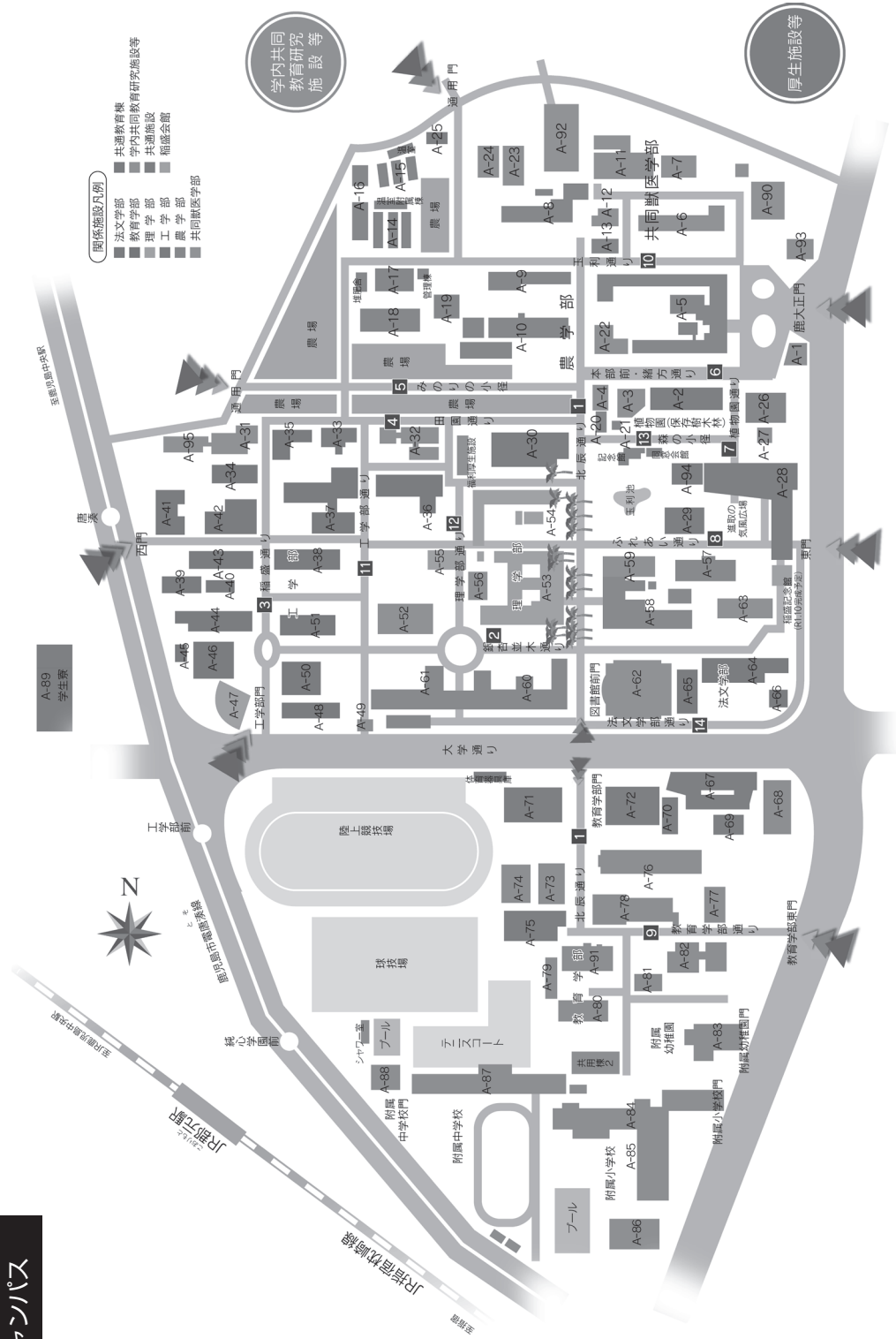
会費：¥5,000- (学生 ¥3,000)

同封の振込用紙で9月30日までにお払ください。

お払後のキャンセルはご遠慮願います。

*お支払いいただいた懇親会費に余剰金が出た場合は、これを学会への寄付として扱わせていただいたうえで会計報告に明記いたします。

キャンパス



共通教育棟 1 号館 : A-57 (個別発表)
 稲盛会館 : A-47 (総会・シンポジウム)
 学習交流プラザ : A-28 (懇親会)

イタリア学会

Associazione di Studi Italiani in Giappone

〒 560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5
大阪大学大学院文学研究科中谷研究室気付

E-mail: studiitalici@gmail.com

URL: <http://studiit.jp/>